

「小特集 ギャンブルの心理学」

意思決定からみたギャンブル行動

上市秀雄

ギャンブルの意思決定プロセス

世の中にはギャンブルをする人もいれば、宝くじも買わない人がいる。このような違いを規定する要因は、パーソナリティのような比較的安定した傾向性(例: Five Factor Model など)、認知・感情要因(リスク認知、ベネフィット認知、能力評価、後悔予期など)、結果に対する金銭的・心理的評価(損益額、楽しさ、後悔など)に大きく分けられる。そしてこれら要因間の関連性は循環している(図1)。つまりパーソナリティが認知・感情要因に影響し、ギャンブル行動を規定する。そして得られた結果に対する金銭的・心理的評価が、再び認知・感情要因にフィードバックし、次回以降の行動に影響していくと考えられる(上市, 2003)。ギャンブルには宝くじのように運だけで決まるものもあるが、ここではパチンコやパチスロのように知識やスキルを必要とするギャンブルについて述べる。

ハイリスクのギャンブルをなぜしてしまうのか

ギャンブルはベネフィットを得るための行動であるので、リスクよりも、ベネフィットの大きさの影響を受けやすい。ビデオゲームを用いて繰り返しパチンコをさせた実験では、ベネフィット認知はリスク ベネフィットが異なる機種の選択行動に最初から影響を及ぼしたのに対し、リスク認知が選択行動に影響したのは3回目からであった(Ueichi & Kusumi, 1999)。つまり人は実際に何度か経験しないと、リスクが大きいからといって、ハイリスクを避けるとはかぎらないのである。そのためベネフィットを重視しハイリスクのギャンブルをした人は、リスクの大きさが選択行動に影響を及ぼしはじめる前に、リスクに慣れ、感受性(恐怖感、抵抗感など)も下がる。さらに

ハイリスクのギャンブルはリターンも大きくなるので、ベネフィットの大きさがより強く強調され、ハイリスクなギャンブルを続けると考えられる。

さらに次回の選択行動は、結果に対する評価からの影響を受ける。勝敗にかかわらず、ギャンブル後の満足度(楽しかったなど)が高い人ほど、自分の能力を以前よりも高く評価し、自分の判断(機種選択や打ち続けるかどうかの判断など)が正しかったと思う人は、次回ギャンブルをするときに楽しさやお金を得ることを、より強く求める。そのためローリスクよりも、ハイリスクのギャンブルを選ぶ傾向がより高くなる(図1)。

このようにして人々は、徐々にあるいは急激に、ハイリスクのギャンブルを好むようになるものと考えられる。

負けているのになぜ止めないのか

あるパチンコ台で打ち続け大きく負けていて、「もう止めたほうがよいのではないか」と思っているが止められず、さらに負債を大きくすることがある。これは第一に、サンクコスト(ある案に投資した後で他の案に変更したとき、その投資資金のうち回収できなくなってしまう部分のこと)を避けたいためと考えられる。止めてしまうとそこで損失が確定してしまうし、自分の失敗(止め時の判断ミス、負けた悔しさなど)を認めなくてはならなくなる。第二に、人は行動をして失敗したときよりも、行動せずあるいは途中で止めてしまって失敗したときの方が後悔を強く感じる。そしてその後悔を最小化する行動を選択する傾向があるためである(上市・楠見, 2004)。打ち続けて結局大負けしてしまった場合に感じる後悔よりも、ある台を打ち続けることを止めた

ら、その後にその台を打った人に大当たりされたときに感じる「打ち続けければよかった」という後悔の方が大きく、その後悔を避けようとする。第三に、人は低い確率で起こる現象を、実際よりも高く評価する傾向がある。そのため今の負けを取り戻す可能性を、実際よりも高く評価している可能性がある。加えてギャンブルをしている人であれば大負け状態から奇跡的に回復した経験がある。これらのため、資金を回収するどころか負けがかさむ可能性が高いとわかっていながら、打ち続けて負債を大きくしまうものと考えられる。

最後に

すべての人がハイリスクギャンブルを好むわけではないし、負けるとわかっていながら打ち続けるわけではない。自分の行動に対して後悔を感じている人は、リスクを自分では制御できないと考えるため、ハイリスクからローリスクへ、そしてギャンブルを避ける行動に変化する可能性も示唆されている(上市, 1999)。ギャンブルは簡単にローリスクからハイリスクへエスカレートするものであるので、手軽な娯楽としてパチンコやパチスロを楽しむためには、常に自分の行動を適切に省みることが必要といえるだろう。

文献

上市秀雄 (2003). 個人的リスク志向・回避行動の個人差を規定する要因の分析, 風間書房.

Ueichi, H., & Kusumi, T. (1999). Change of decision-making processes in repeated risk-taking behavior in a complex dynamic situation, *Proceedings of the 2nd International Conference on Cognitive Science and the 16th Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society Joint Conference*, 946-949.

上市秀雄・楠見孝 (2004). 後悔の時間的变化と対処方法: 意思決定スタイルと行動選択との関連性, *心理学研究*, 74(6), 487 - 495.

Profile-----
うえいち ひでお
筑波大学大学院システム情報工学研究科講師。
1999年東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程修了。博士(学術)。2001年東京工業大学大学院社会理工学研究科助手を経て、03より現職
専門は、意思決定、認知心理学。
主な著書は、「個人的リスク志向・回避行動の個人差を規定する要因の分析」(風間書房)など。

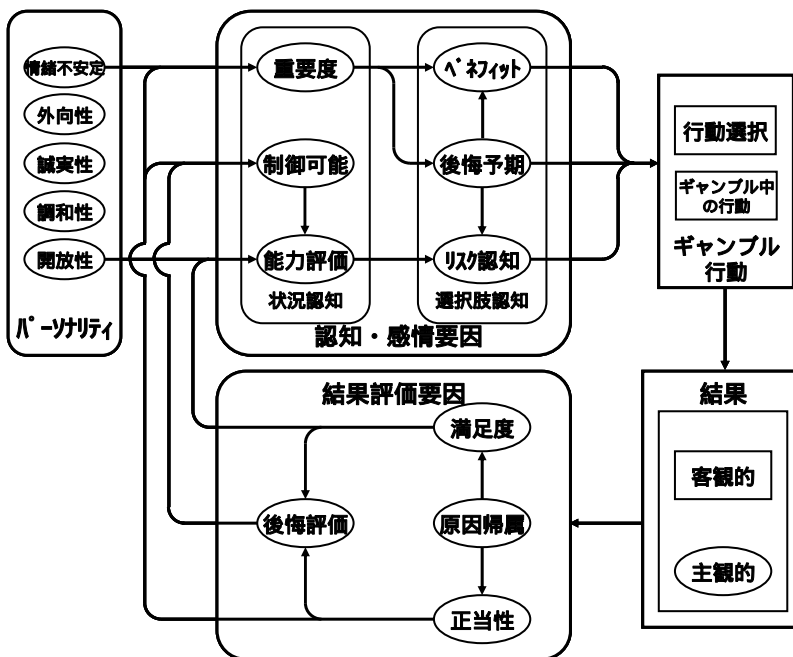


図1 ギャンブル行動の意思決定プロセス概念図(上市,2003 改変)